

中世石窟「やぐら」の盛期と質的転換

田代郁夫

はじめに

- | | |
|----------------------------|-----------------|
| 1. 骨蔵器・分骨容器からみた「中世石窟遺構」の盛期 | 3. 石窟の質的転換から変質へ |
| 2. 石窟の質的転換 | おわりに |

はじめに

中世石窟（やぐら）の発生時期に関する問題は、常に発生の原因から説き起こされてきた。ここでは、まず石窟（やぐら）の発生の原因と発生の特典の問題を切り離し、且つ、その盛期と変質過程を遺物から問題とし、同時に中世石窟（やぐら）の発生とその展開を促した歴史的状況について述べたいと思う。現在、出土している遺物からの考察であり、当然、今後の出土資料によって個々の石窟（やぐら）の発生時期が更に遡る可能性もあろう。しかし、中世石窟（やぐら）造営の盛期がいずれにあったかについては、これまでに集積された遺物によっても充分明らかにすることができるものと思われ、また、「やぐら」を中世石窟遺構として捉え、日本における古代以来の石窟文化の流れのなかに置くならば、遺物がその出土状況、伝世等の問題も含めて特典的に遡るものが出土したとしても、それは中世以前から鎌倉及びその周辺に展開していた石窟からの系譜論の問題であるか、あるいは中世石窟文化の萌芽として認識すべき問題であろう。こうした意味において、文化としての「中世石窟」は個別の事象ではなく、「中世石窟文化」として認識し得る、その時期をどこに置くかといった古代以来、中世、近世と連続する「石窟文化」の区分の問題に帰着するのである。なお、こうした視点から、本稿ではこうした遺構に対する従来の呼称であるやぐらの用語を石窟と呼称し、やぐらの用語を用いるときには、カギカッコを付している。

発生の特典・盛期・変質過程をより具体的にするために、ここでは石窟内出土の考古遺物からその年代を探ってみたい。石塔類については赤星直忠氏によって、その紀年銘資料が多く紹介されており、最近の調査による追加資料も存在する。しかし鎌倉時代後期を遡るものではなく、今回は割愛する。石窟が最初段階の機能を失った後に堆積土中に出土する遺物、あるいは石窟が改変された状況のなかで出土する遺物については、石窟の変質過程との関わりにおいて触れてみたい。

個々の石窟を一時的特典の所産とするのではなく、聖なる空間に展開したものが、その空間の質的变化にともなって機能を転換・変質させていく過程を歴史的背景を踏まえて考察しようと思う。

1. 骨蔵器・分骨容器からみた「中世石窟遺構」の盛期

供養のための華瓶、香炉、かわらけなどと違い、骨蔵器は石窟内の出土状況如何によっては石窟の構築と最も一体化したものと思われ、骨蔵器を中心にその産地における生産年代を追うことは、石窟の発生時期とその盛期を知ることになる。これら骨蔵器は歴史的存在としての石窟の時・空間軸において、多元的に表出する機能の中心的側面を如実に示す遺物と考えられるのである。⁽²⁾ また、今回のテーマではないが、石窟群の存在意義を明らかにする試みである石窟群のパターン化作業においては、南宋風文化で括られる段階の石窟（従来の呼称にいう「やぐら」）群の発生の萌芽から最盛期に至るまでの形成過程とその構造を明らかにする素材のひとつとなり得るであろう。

さて、鎌倉市内出土の骨蔵器類は偶然の発見であったり、諸々の事情によって実測図が作成されていないものも多い。従って、図を掲載できたものは極く限られたものであることをお断りしておきたい。しかしながら、ここで述べようとする骨蔵器の年代観については、写真等で見えるかぎり、概ねここで取り上げたものと同様である。

なお、市内では多数の骨蔵器が出土しているが、本稿で実測図を提示したものは多宝寺やぐら群、新善光寺やぐら群、佐助ヶ谷やぐら群である。また、石窟以外のものとして、極楽寺旧境内、海蔵寺境内、霊山寺旧境内、覚園寺境内、長谷寺境内、八雲神社背後山腹出土の骨蔵器等を提示している。次に各遺跡の概要と骨蔵器の出土状況を概観してみたい。

・多宝律寺⁽⁴⁾

多宝寺は既に廃寺となっているが、その廃寺址は鎌倉市扇ヶ谷二丁目268～3に所在する。多宝寺の開創年代については明確ではないが、西大寺叡尊の直系忍性等をはじめとする「新義律僧たちの関東への発展」と彼らが「鎌倉幕府の国家的祭祀の担い手」として活躍しはじめる時期である13世紀の中頃に創建されたものと思われる。極楽寺縁起によれば、忍性は弘長二年（1262）、北条業時の招きに応じて「安吾を多宝寺に結して梵網戒經を講じ」、弘長四年（1264）、多宝寺に移りて自己活功德の石の宝塔を建て戒疏を講⁽⁵⁾じたとされている。⁽⁶⁾ 以後、多宝寺は「東密・南京律・浄土等の諸教学の専門道場として、鎌倉における戒律復興の拠点としての地位を保っていく」⁽⁷⁾のである。開基は北条業時、開山は忍性と考えられている。

谷戸を数段に造成し、その最上段の最も奥まった中央の平場に現在、「覚賢塔」と呼ばれる大五輪塔が建つ。覚賢塔の名称の由来は、大正12年、関東大震災によって倒壊し、昭和13年に出土品の精査が実施された際、「多宝寺覚賢長老遺骨也」の銘を持つ銅製筒型舍利容器が発見されたためである。この石塔は従来忍性塔と伝承されていたものであるが、石塔の立地、『極楽寺縁起』に「明るる年再び多宝寺に移り自己活功德の石の宝塔を建立し戒疏を講ずるなり」⁽⁸⁾の文言からこの大型五輪塔は忍性の活功德の宝塔ではないかと考えられている。⁽⁹⁾ この精査の折り、5点の銅製筒型舍利容器が同所より出土しており、覚賢の遺骨も追葬されたものと考えら

れよう。この大五輪塔の立地する平場の一段下方の平場を取り巻くように石窟群は展開している。この平場上にはトレンチ調査によって建物址や石組みの壇状施設が検出されている。石窟群内部からは紀年銘を伴った石塔類や骨蔵器、分骨容器が多数出土している。

第1号やぐらは、昭和34年に赤星直忠氏と神奈川県立湘南高校歴史研究部生徒によって調査された。石窟内奥壁に接して壇が設けられ、壇上横一列に6個の納骨穴が穿たれており、内部に火葬骨が納められていた。図2—17は瀬戸鉄釉華瓶で、第2納骨穴の上に倒れた状態で出土したものである。図2—18は瀬戸灰釉合子で、壇上に置かれた左端の地輪の前から出土している。内部には火葬骨が納められていた。分骨容器として利用されている。第2号やぐらから第10号やぐらまでは第2次から第3次調査として、昭和37年から39年にかけて学習院大学輔仁会史学部によって調査された。第4号やぐらは中央の壁によってふたつに分けられ、東側を4号A、西側を4号Bと呼称されている。4号Aにはその前面に地輪がほぼ完全な形で置かれ、地輪直下の納骨穴内から山茶碗（図5—56）で蓋された舶載黒褐釉壺（図5—57）が骨蔵器として埋納されていた。4号Bには北側に凝灰岩製五輪塔の地輪が置かれ、その南側に小さい礫が敷き詰められる。さらにその中央に円形の納骨穴が穿たれ、その中に常滑壺（図3—23）が骨蔵器として納められていた。第5号やぐらは玄室内部前面に礫が敷かれ、両側壁、奥壁に沿って13基の地輪が置かれ、左壁の前方に更に2基の地輪がその内側に、また、奥壁前方にも1基の地輪が同様に置かれていた。これら地輪の直下から計5個の常滑壺が骨蔵器として出土している（図3—27・29、図4—41・42・43）。第6号やぐらは左壁に穿たれた龕状施設内右奥の五輪塔地輪直下に穿たれた納骨穴中から骨蔵器としての瀬戸瓶子（図2—10）が出土している。第10号やぐらは玄室右壁が龕状に拡張され、玄室内には五輪塔が原位置に近いと考えられる状況で出土している。玄室奥壁直下中央部付近に納骨穴が穿たれ、舶載黒褐釉壺（図5—55）が河原石で蓋されて埋納されていた。玄室入り口近くにある凝灰岩製の基壇の下から瀬戸鉄釉瓶子（図2—9）が出土している。内部に火葬骨が「一体分」納められていた。報告者は出土状況を述べ、「当やぐらが造営されてから間もなく埋葬されたもの」と考えている。また、左壁寄りの五輪塔台石とその右側の台石の直下に穿たれた納骨穴中から常滑壺（図4—40・45）がそれぞれ出土している。第11号やぐら玄室内からは19基の五輪塔が奥壁および左壁に並列して出土し、右壁に穿たれた龕状施設内部には壇が設けられ、奥壁に並行して5基の五輪塔が出土している。後列左の地輪前部に床面をわずかに穿って常滑壺が置かれ、また奥壁左隅に瀬戸小壺、右隅に床面を穿って納骨穴を設け常滑壺が埋納されていた（図2—16、図3—28、図4—36）。なお、報文中には「発見された五輪塔地輪」とあるだけで、いずれの五輪塔か不明であるが紀年銘の刻されたものがある。正慶元年（1332）、正慶二年（1333）、貞和（1345～1350）の年号が確認されている。玄室内の五輪塔はいずれも岩盤床面より高いレベルで出土しており、周囲からは夥しい量の骨片が出土していることから、石窟造営時期からさほど時間差なく埋納された骨蔵器に伴うものではなく、それ以降に追加された石塔と考えるべきであろう。第14号

表1 骨蔵器出土一覧(1) *「骨蔵器」欄中、○一人骨遺存 ×一人骨の発見なし ?一人骨不明

名 称	五輪塔	宝篋印塔	板 碑	他	骨蔵器(図版番号)	その他
多宝寺跡やぐら群 1号やぐら					○瀬戸灰釉合子(18) ×瀬戸鉄釉花瓶(17)	五輪塔 かわらけ
2号やぐら					○銅製水滴	土製馬 かわらけ
4号やぐら					○かわらけ ?常滑壺(23) ○舶載黒褐釉壺(57) &山茶碗(56)	五輪塔
5号やぐら					○常滑壺 (27 29 41 42 43)	写経石 五輪塔
6号やぐら					○瀬戸瓶子(10)	五輪塔
9号やぐら			元応二年(1320) 応安 (1368~1375)			五輪塔
10号やぐら					○瀬戸鉄釉瓶子(9) ○常滑壺(40 45) ○舶載黒褐釉壺(55)	
11号やぐら	正慶元年(1332) 正慶二年(1333) 貞和 (1345~1350)				?瀬戸小壺(16) ?常滑壺(28 36)	五輪塔 かわらけ
14号やぐら					?常滑壺(33)	五輪塔 写経石
19号やぐら	嘉暦二年(1327)				○瀬戸四耳壺(8) &瀬戸卸皿(7)	五輪塔
松谷寺やぐら					○常滑壺(3) ○常滑壺(25) かわらけ(24)	
新善光寺跡内やぐら 火葬墓2ほか		明德二年(1391) 明德三年(1392) 明德二二(1393) 明德五(1394) 應永(1395) 應永八(1401) 應永廿二年 (1417)			○かわらけ(1) ○瓦質香炉(2) ○常滑甕?(47) ○白磁四耳壺(52)	舶載陶磁器 国産陶器 瓦 瓦質製品 写経石 砥石 銭
覚園寺開山塔 納置品	【銅五輪塔】 元亨三年(1323)			【笹塔婆】 正慶元年 (1332)	○瀬戸広口壺(13) ※開山心慧没年1306 ○褐釉壺	
佐助ヶ谷遺跡内やぐら 2号窟 升状遺構					○瀬戸四耳壺(4) ○瀬戸四耳壺(6) ○常滑壺(19) ○常滑壺(21) ○常滑壺(31) ○常滑壺(38) &かわらけ(37) ○白磁水注(53)	かわらけ 瀬戸折縁深皿 (後期Ⅲ) 常滑甕 (9型式) 常滑鉢 (8型式?) 東播系鉢 瓦質火鉢 砥石 石臼 筭
No.302遺跡内やぐら (八雲神社境内)					○常滑壺(20) ○常滑甕(49)	かわらけ 釘など
極楽寺旧境内遺跡 内やぐら 2号窟					×常滑甕(48 50)	かわらけ 玉石 部材
霊山山頂出土				【墓碑】 嘉暦二年 (1327)	○瀬戸広口壺(11)	
覚園寺 第二代大燈和尚塔					×褐釉双耳壺(54)	水晶五輪塔& 金銅蓮台
極楽寺旧境内 奥之院					○瀬戸広口壺(12) ○瀬戸小壺 ○瀬戸広口小壺 ○青白磁合子身	

中世石窟「やぐら」の盛期と質的転換（田代）

表2 骨蔵器出土一覧（2） * 「骨蔵器」欄中、○一人骨遺存 ×一人骨の発見なし ?一人骨不明

名 称	五輪塔	宝篋印塔	板 碑	他	骨蔵器（図版番号）	その他
海蔵寺裏山					○瀬戸四耳壺（5） ○瀬戸水注（15） ×瀬戸水注（14） ○常滑壺 （22 32 35 39 44） ×常滑壺（30 34） ○常滑壽口壺（46）	金銅製飾り金具 かわらけ
海光山慈照院 長谷寺					○常滑壺（26） ×常滑甕（51）	菊花丸双鳥鏡 銅製品
多宝寺寛賢塔					○銀製舍利瓶器 （嘉元四年1311）	
極楽寺境内 石造五輪塔 （寺伝忍公塔）					○金銀鍍五輪塔形骨蔵器 （延慶四年銘1311） ○銅製骨蔵器 （善願上人在銘） ○銅製筒型骨蔵器 ○瀬戸鉄釉合子 ? 瀬戸灰釉合子 （中Ⅰ or Ⅱ） ※順忍没年1323	
龜ヶ淵やぐら群	永享五年（1433） 文安三年（1446）	永享八年 （1436）			○黄瀬戸筒型陶形器 ○常滑甕	火葬骨
葛原岡やぐら群	正和五年（1316）				? 瀬戸花瓶 ? 常滑甕、壺	板碑 火葬骨
光明寺裏やぐら群	嘉慶三年（1389） 明德五（1394） 応永 （1394～1428）	永徳元年 （1381）			? 常滑壺	板碑
極楽寺やぐら		文保元年 （1317） 佐介右馬允藤原 成家			? 常滑壺	こね鉢 かわらけ 瓦質香炉 磑
釈迦堂奥やぐら群	正慶二二年 （1335）		元享 （1321～1324）		○素焼納骨壺&かわらけ ○黄瀬戸壺 ○常滑壺	写経石 かわらけ 頭骨（刀痕）
銭洗弁天裏 やぐら群	元徳二年（1330）		延慶二二年 （1311） 正和壬子（1312） 正和元年（1312） 正和二年癸丑 （1313） 正和二年（1314） 元應二年（1320） 嘉暦二年（1328）		? 古瀬戸壺 ? 常滑壺	
弁ヶ谷やぐら群	永徳二二年 （1382）	至徳三（1386） 応永八（1401）		【宝塔】 応永二（1395）	○瀬戸瓶子 ○常滑甕	かわらけ 常滑 皿 瀬戸香炉 瀬戸卸皿
十二所やぐら群			応永八年（1401） 応永十二年 （1405） 永享四年（1432） 永享九年（1437）		? 瀬戸壺 ? 常滑壺	磯 瓦質小仏像 五結杵
理智光寺谷やぐら					? 常滑甕 ○水晶製舍利器	五輪塔 漆塗り 土製品 土葬骨
極楽寺前やぐら					? 瀬戸壺	
月影谷やぐら群					○常滑壺	
大谷戸やぐら群					○瀬戸劃花文壺	
極楽寺坂間氏裏や ぐら 第1号穴					○常滑壺	五輪塔
飯島やぐら群					○常滑壺	懸仏 古鏡 貝 鉄製品 かわら け

やぐらでは玄室中央の地輪の下からかわらけで蓋した常滑壺(図4—33)が出土している。第19号やぐらは報文によれば、「天井部の無い形で側壁は三角形に造られている。」と述べられている。石窟形態をとらない墳墓の可能性もあろう。岩盤削平面の中央に納骨穴を穿ち、その中に瀬戸卸皿(図2—7)で蓋した瀬戸四耳壺(図2—8)が骨蔵器として埋納されていた。岩盤面上には納骨穴をも覆う形で玉砂利が敷かれ、その上に五輪塔の地輪が置かれていた。五輪塔の銘文には嘉暦二年(1327)の年号と「沙弥□道」と刻されていた。

・松谷寺跡内やぐら⁽¹⁰⁾

松谷寺もまた廃寺である。佐助谷に「松ヶ枝」と称する所があり、松谷の音が転化したものと考えられている⁽¹¹⁾。現在では、佐助1丁目19の谷戸付近だけを松ヶ枝、松ヶ谷と称しているようであるが、本来は佐助1丁目10～12、17から19までの各谷戸を含む広大な地域を称したものらしい。金沢文庫文書によれば「鎌倉松谷寺」「相州松谷寺」「相州深沢松谷山」「相州鎌倉佐介松谷文庫」等々とあることから、北条一族の佐介氏の邸が佐助谷にあり、そこには金沢北条氏の称名寺と金沢文庫の関係のように、松谷寺と松谷文庫あるいは佐介文庫と称されるものが一体として存在していたと推定されている⁽¹²⁾。松ヶ枝は四つの支谷からなり、本稿図版松谷寺やぐらとして例示した骨蔵器が出土したのは、最も北側の谷戸に展開する石窟群出土のものである。また、佐助谷やぐら出土として例示したものは、最も南側の支谷の石窟群より出土したものである。松谷寺の開山、開基については不明だが、開基については佐介北条氏が最も有力であろう。松谷寺の宗風については禅・天台・真言・華嚴・諸行本願義系浄土等の兼修された、いわゆる顕密双修の寺院であったろうとされている⁽¹³⁾。諸宗兼学の風は鎌倉の寺院においては一般的であり、北条氏の開基を考えれば、他の北条氏関係の寺院の宗風からみて首肯し得るものである。

図示した骨蔵器(図1—3)は、1号窟玄室奥の壇上に穿たれた納骨穴に埋納されていたものである。常滑窯製品と思われる。図3—25は常滑壺で、かわらけ(図3—24)で蓋されていた可能性がある。11号窟玄室に納骨穴を穿って骨蔵器として埋納されていた⁽¹⁴⁾。

・佐助ヶ谷遺跡内やぐら⁽¹⁴⁾

佐助ヶ谷遺跡は佐助ヶ谷全体を指す行政上の遺跡の範囲であるが、ここに取り上げる骨蔵器を出土した石窟は、前述した松谷寺址の一画に含まれるものであろう。鎌倉市佐助1丁目11に所在し、四つの支谷からなる松谷寺址の最も南に位置する谷戸に開鑿された石窟である。骨蔵器を出土した石窟は2号穴であるが、この石窟は通例の石窟に比してやや特異な形状を呈しており、羨道部にあたる部分に枅状の施設を穿ち、この底部に七つの骨蔵器が納められていた。骨蔵器は瀬戸四耳壺2点(図2—4・6)、常滑壺4点(図3—19・21・31、図4—38)、白磁水注1点(図5—53)である。

・新善光寺跡内やぐら⁽¹⁵⁾

新善光寺跡内やぐらは鎌倉市材木座四丁目542番16他に所在する。二穴の石窟に挟まれるよ

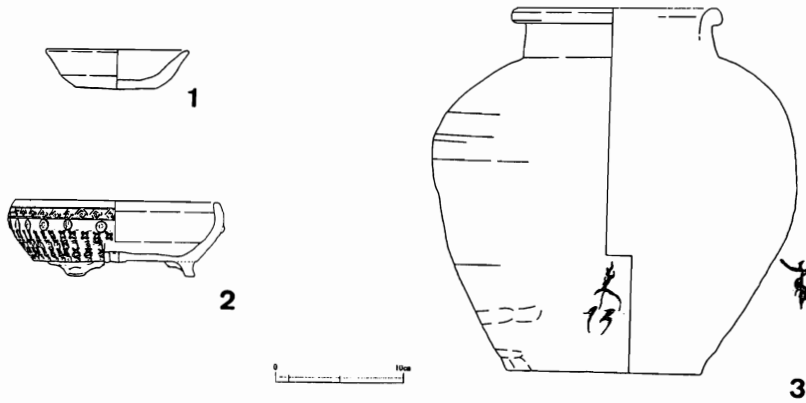


図1 土製品、常滑骨蔵器

うに崖裾の岩盤を掘り込んだ「コ」の字形の区画が検出され、この区画の中央に玉石が方形に積み上げられ、その上に凝灰質砂岩製の五輪塔が置かれていた。玉石の下部、岩盤面には蔵骨穴が穿たれ、中に火葬骨がぎっしりと詰まった白磁四耳壺が埋納されていた（図5—52）。この「コ」の字区画の前面には柵が巡らされ、入り口の門施設も確認されている。また方形に積まれた玉石には写経が明瞭に遺存し、その回りには垣が巡っていたことも確認されている。この施設と両サイドの石窟が一体のものであることは、その配置からみて明らかであり、ここにも石窟の存在形態のひとつがあるのである。蔵骨穴から出土した白磁四耳壺の年代は、同様の製品を出土している東松山市の光福寺境内にある元亨三年（1323）銘の宝篋印塔から出土した白磁四耳壺と近似しており、14世紀前半の所産と考えられる。

次に、各石窟出土の骨蔵器の生産年代について触れてみたい。佐助ヶ谷遺跡内やぐら出土の瀬戸四耳壺のなかでも図2—6はやや古く、多宝寺11号やぐら出土の瀬戸小壺とともに古瀬戸前Ⅱ期、すなわち13世紀前半代の製品とみていいようである。

このように石窟内出土の骨蔵器は瀬戸、常滑ともに概ね13世紀中頃から14世紀中頃にかけての年代が与えられる。これらの骨蔵器の埋納状況からは、石窟の造営と骨蔵器の埋納が一体の営為であったことが推定され、骨蔵施設を設ける石窟については、まさにこの時期が骨蔵施設を設け、骨蔵器を使用する石窟が発生し展開した中心的時期といえよう。

ところで、貿易陶磁の鎌倉における輸入の最盛期は最も器種の豊富になる13世紀半ば以降である。都市鎌倉の谷戸をほとんど占地していた寺社の造営・経営の経済的基盤に、北条一族による対中国貿易の利潤が当てられていたであろうことはまちがいない⁽¹⁶⁾。一方、国内における瀬戸は中国陶磁を模倣し、常滑では5型式から6b型式にかけて古瀬戸製品をモデルにしたと思われる器種が一斉に登場する⁽¹⁷⁾。こうした関係を考えるならば、まさにこうした時期に寺院内において、石窟は骨蔵施設としての機能を担ったものといえ、この時期に石窟内においても骨蔵器が盛んに用いられたのである。

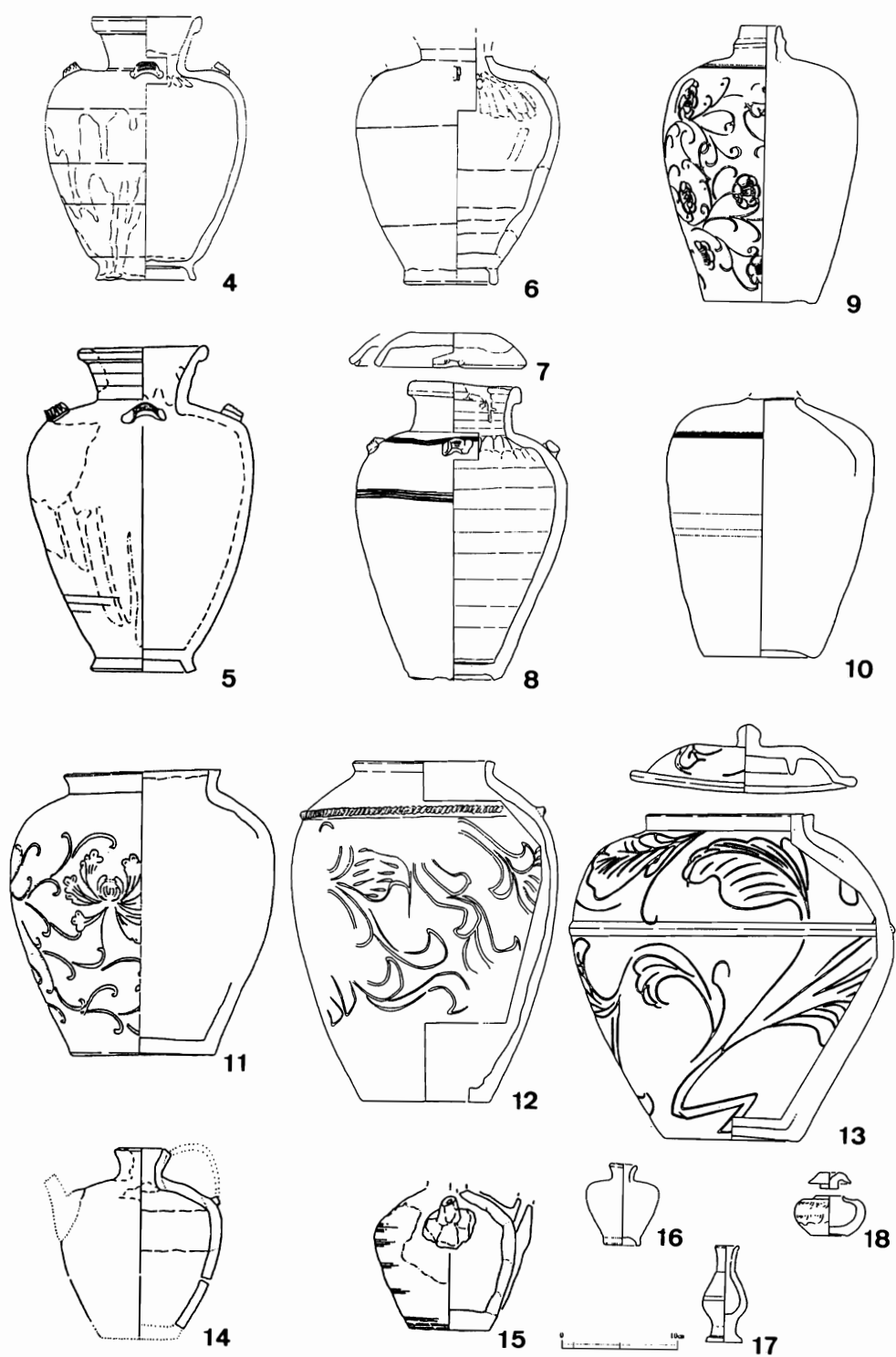


図2 瀬戸窯蔵器

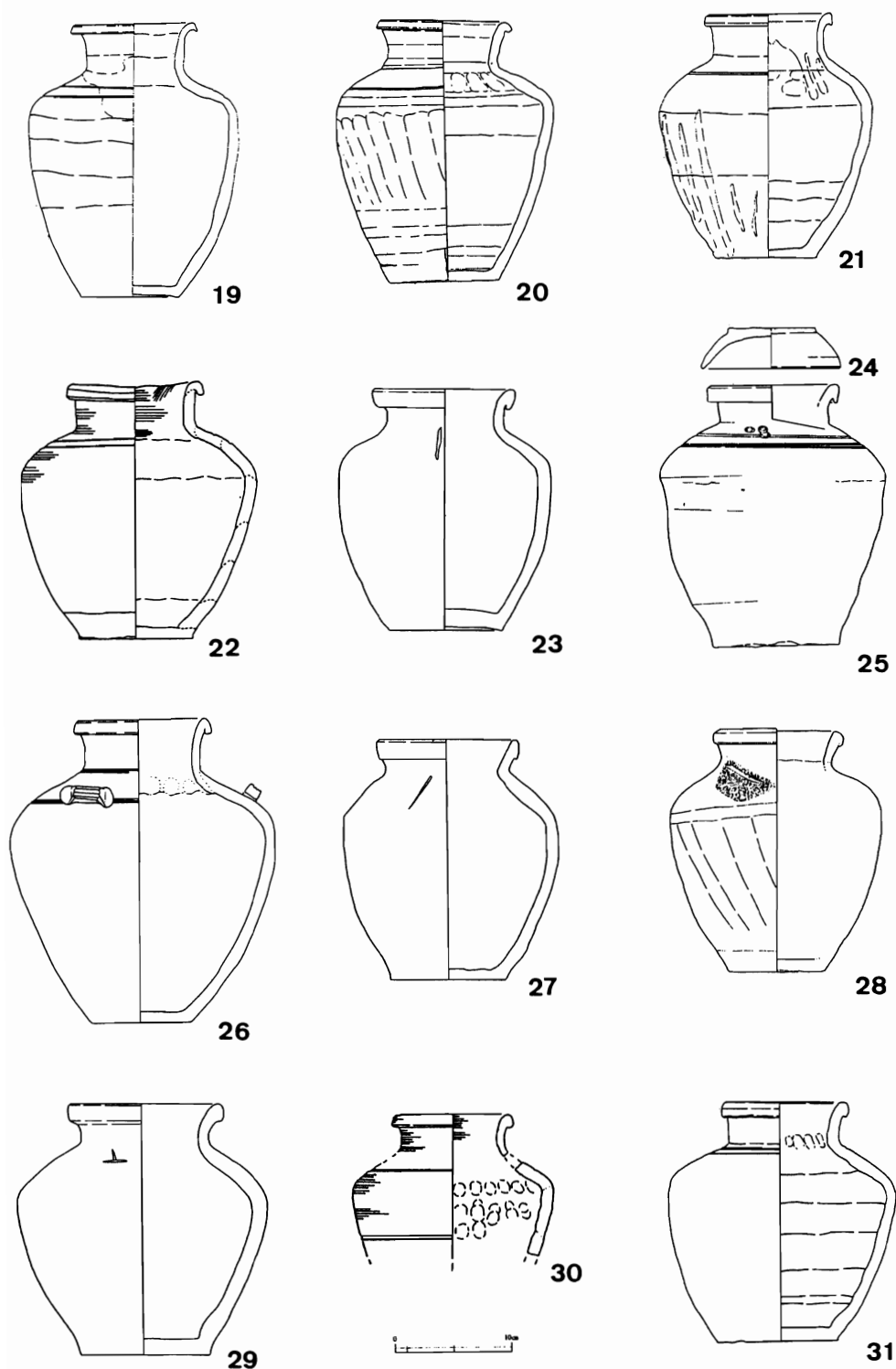


図3 常滑窯骨蔵器（1）

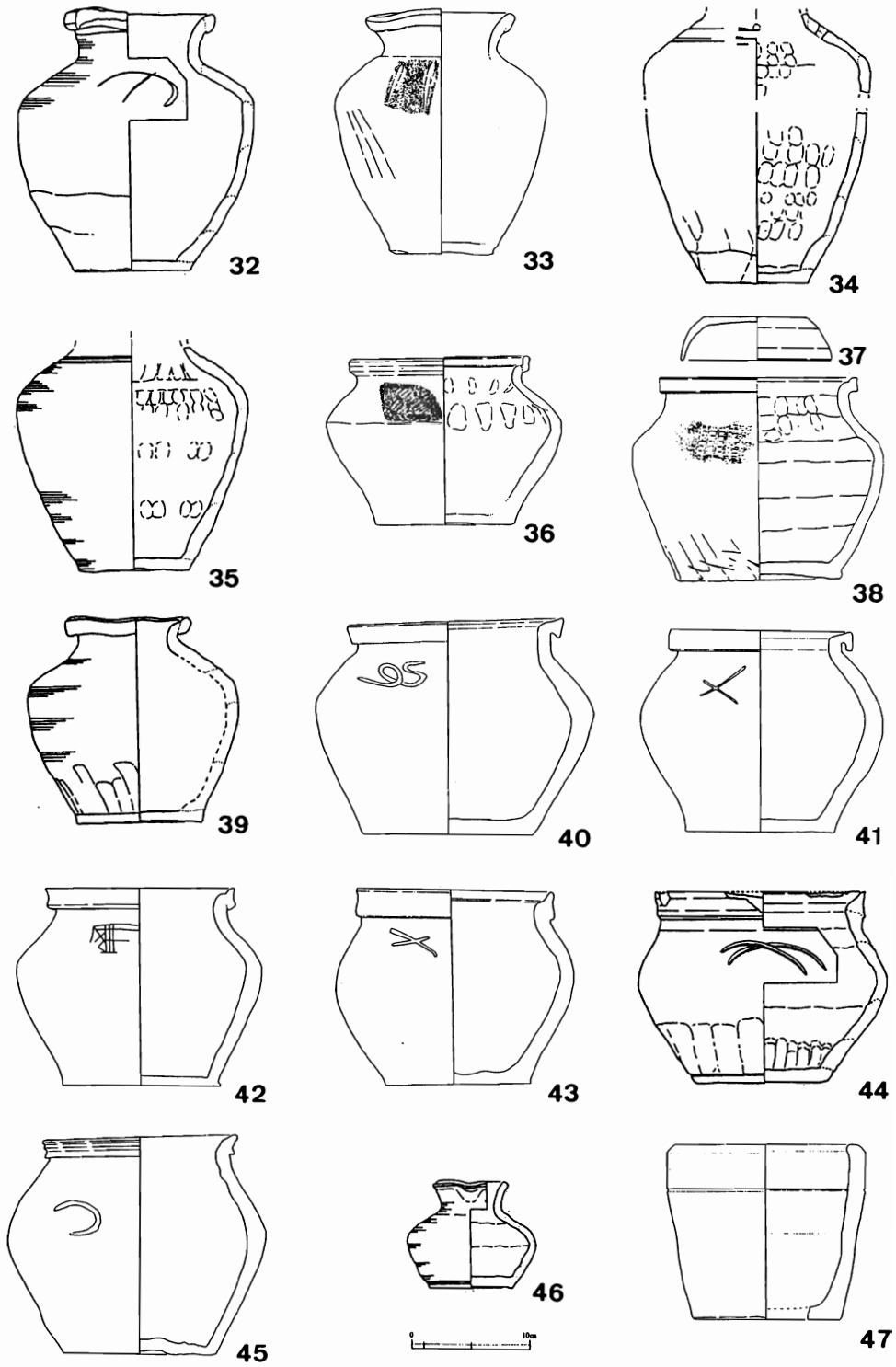


図4 常滑窯骨蔵器(2)

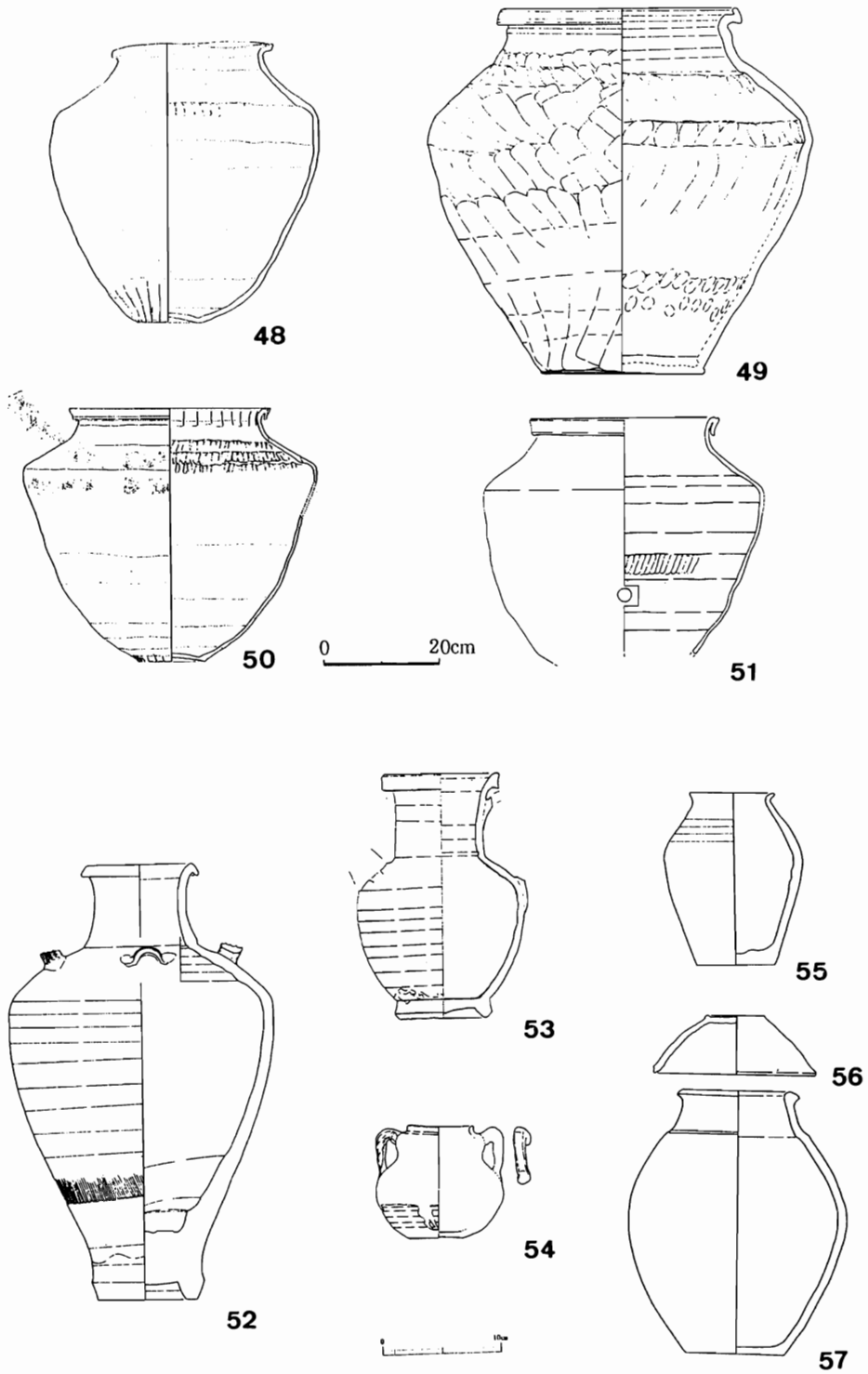


図5 常滑窯（3），船載陶磁器骨蔵器

2. 石窟の質的転換

石窟自体はその後、14世紀中葉から後半以降も造営され続け、この頃より石窟に蔵骨を追加する例が多い。しかし、骨蔵器には古瀬戸中Ⅲ～Ⅳ期と古瀬戸後期の製品、常滑8型式以降の製品の出土例はない。すなわち、古瀬戸編年でいえば14世紀半ばもやや早い段階、常滑編年でいえば1350年以降の鎌倉幕府滅亡以後の時代である。この時期、足利氏が鎌倉に自らの寺院を造営しており、幕府滅亡により北条氏の氏寺の要素の強い寺院や幕府の政策に深く関わっていた寺院の一時的経済的衰微も考えられるが、⁽¹⁸⁾それでは、その後、なぜ、瀬戸・常滑骨蔵器が復活しなかったのかは説明しきれない。この問題については、足利幕府の庇護によって北条氏関係の寺院が存続していく中で、より私寺としての要素が薄まり、一大檀越に依存した経済的基盤から脱却し、より広範な檀越への依拠に変化していった点に求めるのが妥当であろう。すなわち、石窟内からは玄室に無造作に厚く堆積する火葬骨に混入して出土する14世紀末から15世紀前半にかけてのかわらけと共に小型化した石塔類が多く出土する。新善光寺跡内やぐらの中央部「コ」字区画上段遺構で出土した分骨容器の瓦質植木鉢は、明德・応永・永享といった年号を有する小型石塔類とともに出土している。広範な欲求に答えたこれら小型石塔類の受容層こそ、新たな寺院の経済的基盤として台頭してきた階層であり、かれらによって寺院とともに石窟もその性格を変質させられたとみるのが妥当であろう。⁽¹⁹⁾瀬戸・常滑の骨蔵器を石窟内で使用しないこれらの階層は、骨蔵施設を設け、骨蔵器を使用する石窟の機能を変質させたといえよう。それは決して瀬戸・常滑の骨蔵器を購入できなかったのではなく、山野河海から寺院内へという宗教的欲求のなかで、前代のやぐらを造営した階層とは異質の機能を石窟に付与したものといえよう。

中世墓制の古代墓制に対する特質は、他界観の相異に基づく分骨行為の有無であると考え⁽²⁰⁾が、寺院の経済的基盤の変化と相俟って、分骨行為から納骨行為への過度期的様相が、この時期にみてとれるのである。こうした特定大檀越から複数檀越⁽²¹⁾への変化は言うまでもなく、上位の階層に対して、より下位の階層の経済的上昇を意味するが、列島規模では15世紀代に入って明確になる。その萌芽は、鎌倉時代を通じて醸成されたものではあるが、鎌倉幕府の滅亡を一大契機として、その影響が各地寺院における檀越の交替を促し、寺院の衰退に対しては、より下位の階層からの宗教的欲求と経済的上昇が相俟って寺院を存続させるに至ったことも事実であろう。

ところで、14世紀後半のこうした状況の中から、すべての石窟が質的転換を遂げたわけではなく、14世紀後半以降の瀬戸・常滑の骨蔵器を埋納した石窟が今後検出される可能性は有りうることを確認しておきたい。なぜならば、大きな流れとして、石窟は質的に転換するが、個々の石窟は特定大檀越の寺院内において、前代の性格を維持しつつ営まれたものも当然有りうるからである。『空華日用工夫略集』に応安元年（1368）、足利尊氏の室が逝去し、翌年に遺骨を

「収める」ため保寿院に新たに地藏の小像を造り、「穴所」の「岩背」に坐せしめたとある。ここにいう「穴所」と「岩背」の語句から意味するところは「やぐら」であろうと思われるが、このような場合には例えば、14世紀後半の瀬戸製品などが骨蔵器として使用される場合も有りうるものと思われるのである。⁽²²⁾

3. 石窟の質的転換から変質へ

古瀬戸中Ⅲ期は鎌倉幕府崩壊後にあたるが、この時期にあたる石窟内出土の骨蔵器が見当たらない。華瓶に関しては古瀬戸中Ⅰ期・Ⅱ期を通じて出土する華瓶Ⅰ・Ⅱ類は、古瀬戸中Ⅲ期以降も引き続き石窟内で使用されたようで、古瀬戸中Ⅳ期以降に出現する華瓶Ⅲ類なども窟内より出土している。これにより古瀬戸中Ⅲ期以降も具体的内容はともかく、引き続き瀬戸窯製品を用いた石窟内での供養が行われていたことが了解される。こうした中、骨蔵器に瀬戸・常滑が14世紀中頃以降使用されなくなる理由については、寺院の経済的基盤の変化とそれに伴う石窟の質的転換としてこれまで述べてきた。本節では石窟のあるものが更に大きく変質する状況について述べよう。この問題については「鎌倉の甕蔵」と題して別稿を模索中なので簡単に述べておきたい。

鎌倉で見られる石窟の中には玄室内床面に掘り鉢状の円形壙をいくつも穿ったものがある。有名なものとしては鎌倉市扇ヶ谷にある臨済宗寺院海蔵寺の通称十六ノ井などである。玄室床面に16個の円形壙が穿っており、岩盤から染み出る清水を湛えているためにこのように呼ばれ、「鎌倉十井」のひとつとして有名である。しかし、同様のものは天台宗宝戒寺裏手の他、報国寺旧境内のやぐら⁽²³⁾、公方屋敷跡内やぐら⁽²⁴⁾、杉本寺周辺遺跡内やぐら⁽²⁵⁾等々にもある。これらの石窟からは14世紀代の遺物が出土するものの、かわらけ等の年代観からすれば、15世紀後半以降に改変を受けたことが窺われる。こうした掘り鉢状に複数穿たれた円形壙の性格については、市街地遺跡で多く検出され、また寺院址などの調査でも既に検出されている「据え甕遺構」と考えられる。杉本寺周辺遺跡内やぐらでは、掘り鉢状円形壙からは9型式・10型式（15世紀）の常滑大甕片が出土している。

さて、石窟は極めて宗教的遺構であるが、こうした石窟の変質をどのように考えるべきであろうか。寺院廃絶後に一般の屋敷地へと変化する中で、こうした利用のされかたをすることも考えられよう。事実、15世紀以降に塵芥穴と化したり、死体遺棄の場となった石窟も多い。しかし、先に例示した石窟群はいずれも15世紀段階には寺院や塔頭の所在した所である。この石窟が何故変質したかの問題は、まさに中世石窟文化の終焉の問題なのである。日中関係は日明関係となり、明の対外政策の転換は、日明貿易の衰退を引き起こし、村井章介氏をして「渡来僧の世紀」と呼ばしめた日中の盛んな交流は経済的にも文化的にも衰退の一途を辿る。寺院建築や仏像にも異国的な雰囲気⁽²⁶⁾がしだいに薄れ、建造物の建て替えられるごとに和様化が進むの

である。宗教的空間における構造物たる石窟もまた石窟ではないものに代替していくのではなからうか。石窟は既に述べているように、宗教的空間を構成する伽藍配置と密接に関わり合って、その立地が決定されている。宋風の伽藍配置から和風の伽藍配置への変化は、新たな伽藍配置から構造物としての石窟を置き去りにしてしまったといえよう。ある石窟は庫裏の裏手になって貯蔵施設となり、あるいは玄室に井戸が穿たれ、水場として利用され、また塵芥穴と化していったのである。火葬骨が蔵されたり、供養塔が納められたりする極めて宗教的な施設である石窟が、その展開する聖なる空間の転移・変質と共に、存続する寺院内においてすら、かくも変質してしまった背景にはこうした歴史的背景を考えざるを得ないのである。

おわりに

中世石窟遺構「やぐら」の発生時期については種々の見解が提示されてきた。⁽²⁷⁾これまでの研究を振り返ると所謂「やぐら」の発生時期の問題については、はじめに述べたように、常にその発生の原因、すなわち起源の問題と表裏の関係で論議がなされてきた。

赤星直忠氏は昭和34年に刊行された『鎌倉市史 考古編』の「やぐら—鎌倉に於ける中世墳墓の様式」の中で、「やぐら」の年代に関する項を設け、それまでに発見されている十二所奥朝比奈峠やぐら出土の弘安九年（1286）板碑、横須賀市大矢部薬王寺跡やぐら奥壁に立っていた元応二年（1320）板碑、鎌倉市瑞泉寺裏山やぐら出土の正和五年（1316）板碑、極楽寺坂間氏裏やぐらの文保元年（1317）宝篋印塔、浄光明寺裏山やぐらの正和二年（1313）地藏石像、神武寺やぐらの正応三年（1290）弥勒石像等を例に「やぐら」内部に納められている石塔類に記されている年号は鎌倉中期以後⁽²⁸⁾になってからのものしか知られていないと述べつつも、『吾妻鏡』建保三年（1215）九月の佐藤伊賀前司朝光埋葬記事から推定して、現在の二階堂ヶ谷奥に展開するいわゆる百八やぐら群が山城前司行政家の後山に当るとし、この記事をもって「やぐら」に埋葬したものと考え、「当時やぐらに埋葬することは一般的なことであったから特に詳細な記事がないものであろう。」として、文献から「やぐら」の発生時期を鎌倉時代初めまで遡らせたのである。この考え方は昭和9年の『考古学雑誌』第24巻3号「矢倉内壁の彫刻に就いて」で既に述べられているもので、文献からみれば「やぐら」に埋葬することは、鎌倉初期に既に始まっているとする氏の考えが繰り返されているのである。文献資料の解釈としては、文言の類推・拡大解釈を越えたものであり、また考古学の方法としても、現在地表に現れている「百八やぐら群」の存在のみを視野にしている点は強引な解釈と言うべきであるが、こうした「やぐら」発生に関する氏の年代観については、次に記す氏の「やぐら」起源論の根底に流れるひとつの考え方に基づき導かれたものといえよう。

すなわち、鎌倉への武士の集中、イコール彼らの墳墓の鎌倉への集中という論理である。「やぐらの起源と消滅」の項では、武士の鎌倉への集中と「やぐら」の群集を関連づけ、また

昭和12年（1937）、雑誌『鎌倉』12「鎌倉百八やぐら」で述べられた「やぐら」を横穴墓の形態変遷から説き起こし、何らの断絶なく鎌倉期の「やぐら」へと変化したとする考え方を修正し、形態変遷論としては断絶を認めつつ、群集した武士達による横穴墓の再利用から「やぐら」への普及発展を述べている。この「やぐら」の普及発展を加速させたものとして、新御成敗状（仁治三年正月十五日）の「府中墓所事」、いわゆる仁治の法令をもって「やぐら」が鎌倉の丘陵に群集する理由としているのである。⁽³⁰⁾

この点については、後に大三輪龍彦氏によって疑問が投げかけられ、そもそも「やぐら」は丘陵を利用して構築されるものであって、始めから丘陵山腹や崖裾に展開しているものであり、禁令にいう墓所は平地に造られた墓所を指すのではないかというものであった。⁽³¹⁾ 大三輪氏の見解は、武士の鎌倉への集中が鎌倉における彼らの墓の群集を招いたという論理を前提とすることにおいて赤星氏と共通する考え方であるが、まず集中するのは「やぐら」ではなく、平地の墓所であって、仁治三年（1242）の法令以降、「やぐら」が律宗の介在によって考案され、鎌倉の平地部分以外に群集するというものである。大三輪氏の説は仁治三年（1242）をそう下らない時期に「やぐら」が発生したとする考え方であり、「やぐら」の発生に律宗の果たした役割を重視する立場である。「やぐら」発生に関わったとされる律宗寺院の律系寺院としての創建年代と仁治三年との時期に関する問題については検討されねばならない。⁽³²⁾ 仁治の法令そのものの問題については、この法令自体は豊後の大友氏の所領に出されたものであることはともかく、鎌倉においても同様の法令が出されていた可能性は充分認められるとされている。⁽³³⁾ 私はこの法令の性格を平地部分の確保といった都市整備の必要上の法令ではなく、王城思想に基づくものであって、鶴岡八幡宮を中心に都市を計画した比較的早い段階に出されるべき法令と考えている。⁽³⁴⁾ いずれにしても、赤星、大三輪両氏の説は前述した鎌倉への武士の群集と、彼らの墳墓の鎌倉への集中という仮説を大前提とした説である。鎌倉に武士が群集したことは、武家政権の府として事実であろうが、果して彼らの墳墓までが鎌倉に集中したのであろうか。私は鎌倉に集中した御家人達が鎌倉に彼らの墳墓を集中させたという、この大前提に対して疑問を持つのである。鎌倉に群集した御家人達は、在地領主であり、土地に根ざした者たちである。列島各地で検出されている在地領主層の墳墓群の存在をみても、この大前提は成り立たないであろう。一方、鎌倉にも居を構えた有力御家人達や北条一族などは、鎌倉に寺院を建てており、その寺域やその周辺に墳墓を造営した例はあるが、町中に武士の墳墓が満ち溢れたとは考えられない。⁽³⁶⁾ 鎌倉にも拠点を構えた武士団の構成員と鎌倉における氏寺での墳墓の在り方（分骨）、彼らの在地における氏寺と墳墓の在り方（分骨）が問題とされるべきである。

このように「やぐら」といわれる石窟遺構が鎌倉という一地域に極度に集中しているため、これまでの研究史において、研究者をしてその起源（発生の時期）を考察する際に、中世政治都市鎌倉の特質およびその都市としての盛期からダイレクトに結論を導くという方向に向かわせたのも当然のことといえよう。この特質および都市としての盛期から「やぐら」の発生を導

く方向性は決して誤りではないが、鎌倉といえば「やぐら」、「やぐら」といえば鎌倉という認識を背景として、その起源を求めるに、常に鎌倉という都市内部の事情に重点を置いた議論が展開されてきたように思う。それは鎌倉への武士の集中という事実、彼らの墓の鎌倉への集中現象を仮定し、これに対する幕府の都市政策的配慮、政策実施段階における宗教勢力との協力関係等々をもって「やぐら」の発生を云々しようとする議論である。したがって、列島における、更には東アジアにおける都市鎌倉の歴史的経済的、かつ文化的位置付けとそれによって導かれる鎌倉の宗教都市としての特質から起源論に迫る視点が欠落したことは否めない。京都に対する一方の宗教的核としての鎌倉、また大陸との接点としての九州、全国に展開する北条関係の所領、そこに創建され、あるいは中興される寺院には鎌倉の宗教界の法系が取り込まれていったのである。これは他の在地領主層にとっても同様のことであったと思われる⁽³⁷⁾。

「やぐら」発生の原因は、古代以来大陸から波状的に流入してきた石窟寺院や磨崖仏文化を受け入れてきた日本の仏教文化の基調の上に、13世紀中頃から後半にかけての対中国貿易の盛行と共に鎌倉に大きなうねりとなって流入してきた南宋仏教文化の影響であり、また鎌倉の為政者側にこれを受け入れる素地（顕密体制に対するそれ）があったと考えるべきであろう。中国から日本、そしてその中心であった鎌倉への文物の流入は、ただ文物に留まらず、仏像彫刻への影響⁽³⁸⁾、鎌倉彫りへと発展する漆工芸への影響、そしてそれらを最も求めた寺院の伽藍建築への影響とあらゆる分野に浸透していったのである。伽藍配置への影響、とりわけ伽藍配置の変化は、祖師、開山を中心に据える当時の宗教界の動向そのものであり、まさにこの点が武士社会のみならず、日本社会のヒエラルヒーの頂点を目指す北条氏にとって最も受け入れる必然性をもっていたといえよう。

伽藍配置の構造的変化は中国江南の文化をも移入したものである。該期の石窟群の存在形態には、中国南宋の祖師禅を受け入れた禅宗にあっては開山塔を中心に展開し⁽³⁹⁾、律宗にあっては「四分律の奥旨の具現化が意図された象徴的な建造物」である開山塔⁽⁴⁰⁾、すなわち舍利塔を中心に展開する等々の当時の宗教形態がそのまま反映していると考えられるのである。これらはいずれも舍利信仰の隆盛との関わりのなかで考察されるべきであり、この点については今後更に「やぐら」の存在形態、すなわちパターンの抽出作業を続けなければならない。

この立場では、「文化」としての「やぐら」の流入を一時点に絞ることは不可能である。例えば、鎌倉時代初めに渡宋僧栄西が寿福寺に「石窟」の構築を意図したとしても何ら不思議はない。

鎌倉には12世紀から13世紀初めとされる福建省同安窯の貿易陶磁が、大量に持ち込まれており、大陸の文物は鎌倉に確実に流入している。中国との文化的交流も京都を介してかはともかく、早くから確認できるのである。もっとも、鎌倉政権はこの時点で、平氏滅亡以後の対中国貿易を完全に掌握する段階にはなく、それは北条氏による政策、すなわち国内流通網の掌握と対外貿易の独占の完成する段階、得宗体制の確立に至る段階を待たねばならず⁽⁴¹⁾、この段階に至ってはじめて鎌倉に南宋文化の最盛期が現出されるのである。13世紀中頃以降の夥しい量の龍泉

窯青磁の出土状況や工芸的に優れた景德鎮の白磁・青白磁などの豊富な器種をみるならば⁽⁴²⁾陶磁器類に限らぬ文物の往来と商船に便乗した人々の往来、とりわけ渡僧、来朝の僧の多さは想像して余りあるのであって、この時期こそ少なくとも近世の鎌倉住民や我々によって⁽⁴³⁾「やぐら」と呼び慣わされている石窟文化が、鎌倉をはじめとする地域に盛んに展開した時期であり、石窟群の構築された中心的な時期と考えられる。

鎌倉以外の地域を含めて、13世紀中頃以降の状況下において、いわゆる鎌倉的な石窟として発生したものとは異なる石窟が、中世に、古代以来の系譜を引いて存在する場合もありえよう。石窟の多元的性格からみれば容易に推察できるのである。豊後の臼杵の磨崖仏群に中世の追刻による石塔類があり、納骨された痕跡が認められるなど、その例は多いものと考えられる。⁽⁴⁴⁾

以上を要約すれば、「やぐら」は「石窟」の一形態として捉えられ、大陸の文化を波状的に受けてきた古代以来の列島各地の石窟の延長線上に置くことができ、かつ13世紀中頃以降を中心とする大陸文化（南宋仏教文化）の多大なる影響によって再び鎌倉を中心に隆盛したものであって、⁽⁴⁵⁾まず鎌倉の寺院に発生し、各寺院の法系にのって各地に展開したものと考えられる。そして各地への波及については北条氏や有力御家人の壇越としての役割も当然考慮されなければならないであろう。同時に該期の石窟群の存在形態には、幾つかのパターンが読み取れよう。それは中国南宋の祖師禅を受け入れた禅宗にあっては開山塔を中心に展開し、律宗にあっては「四分律の奥旨の具現化が意図された象徴的な建造物」である開山塔、すなわち舍利塔を中心に展開しているのである。そして、15世紀代に入ると日明の経済的交流が衰退し、その影響は寺院社会にダイレクトに反映するのである。宋朝様式から和様へとすべてが変化する中で、ある石窟は終焉を迎える一方、経済的に上昇してきた一定の階層は、石窟をしてその性格を変容させつつ、寺院内において一定の宗教的役割を担い続けさせるのである。この一方の流れは、⁽⁴⁶⁾近世にいたっても庶民信仰の場として、石窟の新たな機能を存続させ続けていくのである。

本稿をまとめるにあたり東国歴史考古学研究所の宗莖富貴子女史に、図版と表の作成をお願いし、陶磁器の編年等々、多大なご教示を頂いた。記してお礼申し上げます。

註

- (1) 古代以来の石窟（その多くは寺院を伴う）は、列島各地にみられるが、鎌倉およびその周辺では、鎌倉市雪ノ下岩谷堂に所在する窟堂（いわやどう）が有名である。『吾妻鏡』によれば文治四年（1188）、頼朝入府の時期には既に存在していたとされている。また、逗子市久木所在の海前山岩殿寺は『吾妻鏡』によれば、岩殿観音堂と称され文治三年（1187）に大姫が、建久三年（1192）には源頼朝が参詣している。
- (2) 従来、赤星直忠氏によれば石窟の機能としては、納骨窟や供養堂としての窟があることが指摘されてきた（鎌倉市史考古編）。石窟の機能としては、納骨の用語を限定的に使用するならば、納骨と蔵骨の窟があり、供養堂としての窟も礼仏窟であったり、礼仏供養が同時に死者に対する供養となるそういう

た窟もあろう。この他に坐禅窟としての機能も考えられる。伝承ではあるが、坐禅窟としては、建長寺開山大覚禅師のものが建長寺背後の勝上献にあり、円覚寺開山堂の上や興禅寺の開山雲居希膺の坐禅窟が石切山の南隣にあったとされ（『新編鎌倉志』）、瑞泉寺本堂裏の石窟も開山夢窓国師の坐禅窟とされている（『鎌倉攬勝考』）。中国の石窟寺院では仏教徒が参禅する禅窟は一般的であり、日本の中世石窟にこうした機能を考慮してもよいのではなかろうか。ちなみに、中国の石窟には僧房窟や僧侶を埋葬する窆窟あるいは倉庫窟などが知られている。

- (3) 石窟群のパターン化作業とは、石窟群の展開する場を一定の宗教的空間として捉え、そこに存在したであろう寺院の伽藍配置をも想定しつつ、石窟群の分布や展開の様態から一定のパターンを読み取り、石窟群の存在意義を明らかにしていこうとする試みである。

田代郁夫 1994.3 「海蔵寺周辺の「やぐら」について―塔頭に展開する「やぐら群」―」『湘南考古学同好会会報』53

田代郁夫 1994.12 「建長寺境内所在の「やぐら」について―塔頭に展開する「やぐら」群―」『湘南考古学同好会会報』55

- (4) 赤星直忠 1959 「浄光明寺境内やぐら調査概報」『鎌倉』1号 鎌倉文化研究会
学習院大学輔仁会史学部 1966.10 『中世墳墓「やぐら」の調査』
多宝律寺遺跡発掘調査団 1976.3 『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会刊
多宝律寺遺跡発掘調査団 1977.3 『多宝律寺遺跡第7次発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- (5) 松尾剛次 1988 『鎌倉新仏教の成立―入門儀礼と祖師神話―』吉川弘文館 201頁
- (6) 大森順雄氏は氏の論考「鎌倉律宗小史」の中で、『金沢文庫研究紀要』1号「極楽律寺要文録」に収められている「極楽寺縁起」から多宝寺の開基を北条業時と推定している。
大森順雄 1976.3 「鎌倉律宗小史」『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』多宝律寺遺跡発掘調査団編、鎌倉市教育委員会刊
熊原政男 1989.1 「極楽律寺要文録」『金沢文庫研究紀要』1号・2号 復刻版 臨川書店
- (7) 大三輪龍彦 「廃多宝律寺について」『鎌倉』第17号 鎌倉文化研究会
- (8) 前註6 「極楽律寺要文録」
- (9) 前註6 「鎌倉律宗小史」
- (10) 土屋浩美 1995 「北条氏に係わる寺院（三）松谷寺（廃寺）」『かまくら春秋』6 かまくら春秋会
- (11) 熊原政男 1989.1 「鎌倉松谷寺及び松谷文庫に就いて」『金沢文庫研究紀要』1号・2号 復刻版臨川書店 38頁
- (12) 同前 37頁
- (13) 同前 45-47頁
- (14) 佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団 1991.3 「佐助ヶ谷遺跡内やぐら」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』
- (15) 新善光寺跡内やぐら発掘調査団 1988.3 「新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書―中世墓の発掘調査―」『昭和62年度鎌倉市材木座地区内急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査』
- (16) 田代郁夫 1995 「中世都市鎌倉における遺跡の画期と出土中国陶磁」『青山考古』第12号
- (17) 中野晴久 1995.12 「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』38頁 小学館
- (18) 田代郁夫 1997.3 瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム討論記録「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界―その生産と流通―」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯 231頁
- (19) こうした歴史的状況の中で、15世紀後半から16世紀段階になると寺院境内に一定階層の土壌墓群が取

り込まれていく。この一定の階層に成長した都市民による講集団を想定したことがある。

田代郁夫 1997.8 「鎌倉における寺院境内墓の発生—長勝寺遺跡検出の土壌墓群について—」『湘南考古学同好会々報』67

- 20) 分骨行為を古代的墓制に対する中世の墓制の特質であるとする考えをかつて述べたことがある。古代末期には茶毘所に骨を残し供養塔を建てる事などが行われ、上層階層の高野への納骨の始まりと共に中世の墓制の萌芽が既にみられることも事実である。

東国歴史考古学研究所・帝京大学山梨文化財研究所 1995.10 シンポジウム資料集『中世の火葬—その展開と地域性—』

田中久夫 1978.6 『祖先祭祀の研究』弘文堂 128頁他

- 21) 田代郁夫 1990.3 「中世鎌倉におけるやぐらの存在形態とその意義」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』217頁

- 22) 蔭木英雄 1982.5 『訓注 空華日用工夫略集—中世禅僧の生活と文学—』思文閣出版

田代郁夫 1996.8 「中世石窟遺構「やぐら」と葬送儀礼—空華日用工夫略集から—」『東国歴史考古学研究』2

- 23) 報国寺遺跡内やぐら発掘調査団・東国歴史考古学研究所 1994.3 『報国寺境内遺跡内やぐら発掘調査報告書』

- 24) 公方屋敷跡内やぐら発掘調査団 1993.3 「公方屋敷跡内やぐら」『平成3年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』

- 25) 杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団 1996.3 「杉本寺周辺遺跡内やぐら」『平成6年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』

- 26) 村井章介 1992.3 「渡来僧の世紀」『都と鄙の中世史』石井 進編 吉川弘文館刊

- 27) 赤星直忠 1959.3 「やぐら—鎌倉に於ける中世墳墓の様式—」『鎌倉市史・考古編』486頁他
吉川弘文館

大三輪龍彦 1968 「鎌倉地方の「やぐら」発生に関する諸問題」『物質文化』11 物質文化研究会

平田伸夫 1970 「中世墳墓堂（やぐら）発生史考—『吾妻鏡』記載に関連して—」『日本歴史』275

玉林美男 1986.1 「鎌倉の葬制」『佛教芸術』164 98頁 毎日新聞社

- 28) 石塔類の紀年銘資料は中期ではなく鎌倉後期のものが知られている。

- 29) 吉川弘文館刊 1989 「吾妻鏡」第二 『改訂増補 国史大系』建保三年九月十五日条

- 30) 佐藤進一・池内義資編 1955.10 『中世法制資料集』第一巻鎌倉幕府法 岩波書店

- 31) 前註27

- 32) この点については千々和 至氏が、律宗が鎌倉で盛んになる時期と仁治の法令との間に、時期的なずれがあると指摘している。

千々和 至 1986.11 「神奈川県・上行寺東遺跡」『歴史手帖』14巻11号（157号）59頁 吉川弘文館

- 33) 石井 進 1979.11 「中世都市鎌倉研究のために—大三輪龍彦氏の近業によせて—」『三浦古文化』第26号 三浦古文化研究会

- 34) 大三輪龍彦 1977 『鎌倉のやぐら—もののふの浄土』151頁 かまくら春秋社

- 35) 田代郁夫 1993.7 「鎌倉の「やぐら」—中世葬送・墓制史上における位置付け—」『中世社会と墳墓』石井 進・萩原三雄編 87頁他 名著出版

- 36) 森 宏士 1984.6 「墳墓・石塔からみた中世都市鎌倉」『史料と伝承』第八号 12頁 史料と伝承の会

- 37) 近年、列島各地で「中世石窟」が確認、報告されている。北は宮城県松島の瑞巖寺、仙台市岩切の東光寺石窟群、福島県いわき地方にもあり、北陸は能登半島の富来町地頭町、九州では福岡県豊前市の常

在山如法寺の石窟，福岡県北九州市八幡西区勝木の白岩山聖福寺の石窟などが知られている。如法寺石窟，聖福寺石窟については元興寺文化財研究所の吉井敏幸氏にご教示頂いた。

豊前市教育委員会 1983 『如法寺—福岡県豊前市所在の中世寺院の調査』（豊前市文化財調査報告書 第4集）

38 林 悦子 1976.11 「土紋—作例と考察—」『三浦古文化』第20号 90頁 三浦古文化研究会

39 前註3参照

40 山田泰弘 1978 「重要文化財覚園寺大燈塔」図版解説『鎌倉の宝篋印塔』鎌倉国宝館図録第22集 7頁 鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館

41 瀬野精一郎 1975 「鎌倉時代における渡唐船の遭難にみる得宗家貿易独占の一形態」『神奈川県史研究』28号

42 前註16参照

43 前註26参照

44 田代郁夫 1996.4 「やぐら」研究の現状と課題2」『湘南考古学同好会々報』62

平田伸夫 1987 「中世都市鎌倉の墓所の問題—やぐら発生に関連して—」『石舞台』第6号 3頁
中京学考古学研究会

45 註44平田論文で、氏は1987年という早い段階に既に中国の石窟寺院の影響を重視されている。中国西方のその影響とするものではあり、筆者の中国江南との交流を背景とする考えとは多少異なるようにも思えるが、氏は中国陶磁器の盛んな流通にも言及しておられ、石窟文化の日本への移入をより大きな視点で捉えられているようである。卓見というべきであろう。何にもまして、氏の言われるやぐらは「造るべくして造られた本来の意味を考えなければならないのではないか」と主張される部分はまさに同感である。新善光寺や多宝寺の例のように区画された平場に建つ石塔と一体化した石窟群をみれば、石窟はまさに目的的行為の所産なのである。決して方便の所産ではないのである。

46 鎌倉に所在する「石窟」がそうであるように、千葉県に所在する多くのやぐら群には現在も信仰の対象になっているものが多いようである。

(脚) 千葉県史料研究財団 1996.3 『千葉県やぐら分布調査報告書』

原稿の募集 !!

『考古論叢 神奈河』は、みなさまで育てる会誌です。

考古学界に衝撃を与えるような論文も歓迎しますが、身近にある資料の紹介や、研究ノートも気楽に投稿してください。ふるっての投稿をお待ちしております。

編集委員 岡本考之 鈴木重信 川口徳治朗

問い合わせ先 川口徳治朗 Tel 045-201-0926 (勤務先)

※「寄稿要綱」は既刊号を参照してください。